

# 内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 氏名：池上 清子（いけがみ きよこ）  
(2) 年齢：70歳  
(3) 参加事業：第1回「東南アジア青年の船」事業（1974年）  
(4) 職業：長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科客員教授  
公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン理事長



## ■参加のきっかけ

若いころの経験は、その後の人生を大きく左右します。私にとって、二つのイベントは、70歳になる今でも、その影響を感じことがあります。

一つ目は高校生の時にAFSを通してアメリカに留学したこと、二つ目は大学生の時に「東南アジア青年の船」事業に参加したことです。

アメリカへの留学では、高校生という限られた知識と経験しかない状態でしたが、非常に感受性が強い時期だったからこそ、感じることは多かったと思います。この留学で得た一番大きかったものは、自分の視点を持ち、意見を持ち、かつ、その意見をきちんと表現することが重要であると気付かされたことでした。

留学から帰国して、大学に入学し、友人の紹介で、日本赤十字社の語学奉仕団に入りました。この古めかしい名前の組織は、1964年の国際的な身体障害者スポーツ大会の時、いろんな国の選手に付き添い、通訳をして必要なことを伝えるボランティアが集まらなかったことをきっかけに結成されと聞いています。日赤の青少年活動の専門家であった橋本祐子さんによって創されました。「橋先生」と私たちは呼んで親しみと尊敬の念を持って、接していました。橋先生の語学奉仕団は、今も健在で、心身障がい者センターなどの施設で英語劇を作り上げ、年に1回、発表会を開いています。2021年に開催された国際的な身体障害者スポーツ大会でも、多くの団員がボランティアとして参加しました。

こんなこともあってか、「東南アジア青年の船」事業（以下、東ア船）が始まった1974年に、日赤の語学奉仕団に対して、東ア船の団員として参加できる人を推薦してほしいと要請がありました。橋先生は、多くを学んできてほしいと、私を推薦してくださったのです。

## ■キャリアパスに影響を与えたプログラム

ナショナルデイ（National Day）は自国を紹介する日で、興味深い1日になりました。日本青年は、「少子・高齢化」をテーマにパネル討議を行って、参加者と議論しました。日本とシンガポールだけが、社会問題として、少子・高齢化を課題としていましたが、他の4か国はまだ大家族が機能していて、少子化に関する理解があったわけではありませんでした。私は自分の家族を紹介しながら、少子化現象を説明しました。例えば、母の兄弟は7人ですが、私には妹が一人いるだけという話をしました。1974年当時、日本の合計特殊出生率は2程度で、まだ少子化現象は起きていませんでしたが、もうすぐ現実となるというようなことを言った記憶があります。

そういった意味で、東ア船のプログラムは、**社会の仕組みや社会構造の違いを知る良い機会**だったと思います。日本とアメリカしか知らない私は、この事業に参加して、「**日本はアジアの一員**」であることを体感しました。恥ずかしいことに、この当たり前のことをきちんと認識していなかったのです。東ア船では、国という枠組みが外れた状況下で、一人一人が自由に意見を言い合って仲間になれました。私にとって一番の収穫は、「**私はアジアの若者と心を開いて話し、手を取り合って共感を共有することができる**」と感じたことです。

この思いは、大学院を卒業して就職する時の進路決定に大きく作用しました。というのも、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）に職を得たのも、世界から貧困をなくし、格差を正に寄与するような仕事に就きたいと考えたからです。私はこれまで、日本の NGO や国際 NGO でも仕事をしてきましたが、国際協力を通じて、女性の人権を守ったり、欲しい時に子どもを出産したりできるように情報とサービスを提供してきました。特に、国連人口基金（UNFPA）では、小さいながらも、東京事務所のトップとして、責任が重い仕事を任せられました。その後、母の介護のため国連を早期退職して、現在は大学で教えています。

#### 事業で得た経験をどのように活かしておられましたか。

船という逃げ場がない環境下で、どのように人と関わるべきかを学んだと思います。船内では、あの人と話したくないとか、この人とは会いたくないからといってずっと部屋に籠もっているわけにはいきません。相手を変えることはできませんから、自分の考え方や行動を変えていくしかありません。どうしたら一緒にやっていけるのか、どうやって折り合いをつけていくのかを、参加青年一人一人が学びました。逃げ場がないというのはネガティブな意味ではなく、今の現実の社会の中でもどのような人間関係を構築できるかということと共通していると感じています。

#### 事業で得たネットワークをどのような場面で活かしておられますか。

特定の場面で既参加青年に助けてもらったわけではありませんが、国連や国際 NGO の会合の際に大いに役立ってきました。初対面の人と話をする時に、東ア船で自分が体験したこと、東ア船の友人から聞いた情報が、新しい人間関係を築くきっかけとなっています。当時の参加国 5 か国に対する土地勘と言いますか、当時の経済状況、どのような考え方をする人が多かったかといった雰囲気を自分なりに理解できているのは大きな強みです。国際会議のコーヒーブレイクでは通常、仕事の話はしないのですが、東ア船の経験を話題にすることによって、業務に関する情報交換がとても楽になりました。国連や国際 NGO 分野で仕事をしていく上でのよろい、仕事をスムーズに行うためのツールとして私を助けてくれました。

### ■ 留学と船事業の違い

私はアメリカに留学していましたので、留学時は、自分（日本）対アメリカの関係、つまりバイラテラル（bilateral、二国間）の関係でした。しかし、東ア船ではマルチの関係、当時の参加国 5 か国の青年との関係を構築することになり、これら 5 か国への理解が圧倒的に深まったことが大きな違いだったと思います。また、1 か国から代表者 1 名だけが来るのではなく、30 名が参加しますので、同じ国の中にも様々な背景や考え方の人がいるという多様性を学ぶことができました。また、船内では朝から晩まで共同生活を送るため、参加青年の良いところも悪いところも全部見えてしまいます。長時間一緒にいるからこそ、いろいろ話ができる、その結果、フラットな横の関係を築くことができました。

#### 船を用いた国際交流の強みや意義とは何でしょうか。

確かに、船を用いなくても国際交流はできると思います。飛行機を使えば、短時間で移動できて、効率的かもしれません。ただ、私にとって印象的だったのは、船内で行われたナショナルデイなど、参加青年が自ら考え、企画する活動です。様々な国の青年たちとグループで行うこの活動は難しいこともありましたが、多国籍の人々と一つのものを作り上げる良い訓練になりました。この活動によって 5 か国に対する理解が一層深まりました。これは、船で移動するという時間的な余裕があるからこそできることだと思います。

## ■「船」事業を継続すべき「今日的意義」とは

事業参加時に感じたのは、同じ年代であるにもかかわらず、日本とシンガポール以外の参加青年は大人びていたということです。1974年当時、フィリピン、インドネシア、マレーシアでは、18歳から30歳という年齢は、社会の一員であると認識され、職場でも学校でも、リーダーとして活動している様子が容易に想像できました。彼らには、「自分たちが自分たちの国を創っていくんだ」という自負、気概がありました。

翻って、日本の参加青年は、一部を除き、学生だったり、会社でもまだひょっこだったりの年代で、自立していたわけではありませんでした。ただ、日本青年も何らかの青少年活動を行っていた人が参加の対象でしたし、私自身も赤十字のボランティア活動で心身障害のある方たちのための施設を毎月訪問していました。ですから、世の中には自分とは異なる生活をせざるを得ない人々がいるということは知っていました。それでもこの社会をどのように変えなければいけないかというところまでは思ひが及びませんでした。自分が社会を変えられるとか変えなければいけないという意識は、当時の日本の青年には欠けていたと思います。しかし、船内で毎日一緒に食事をし、寝泊まりし、ラジオ体操をし、ディスカッションする中で、いろんな国の青年たちがいろんなことを言うのを日々耳にして、どうしてこんなに考え方が違うだろうかと考えるようになりました。彼らにはパッションがありました。まるで明治時代に、国を変えようと勢いのある世代を思わせるような青年たちでした。自分の国はこのようであるべきだという情熱があったのです。

やがて私は人口構造が違うということに気づきます。1974年当時、東南アジアではまだ大家族が主流で、核家族など考えられないことでした。一方、日本ではその頃にもう人口が減少する兆しがあり、高齢化社会に突入していました。日本はある程度成熟した社会になっていて、保健医療のレベルも高く、貧困層の数も少なくなっていましたから、この先、何が必要かということが見えにくい状況だったのかもしれません。

タイのバンコクに参集したとき、当時のバンコクで一番良いホテルに泊りました。首都の立派な通りにあるホテルなのに、ホテルの前に水たまりがたくさんできていて、路上生活者の子供たちが水遊びをしていました。この光景を見て、日本はこういう段階をもう脱したのだなと思いました。同時に、これから日本がすべきことは、このような路上生活をせざるを得ないような家族、つまり社会から取り残されやすい人に対して何ができるかをタイの人と一緒に考えることではないかと気づいたのです。私がやるべきことは、今のSDGsでも言われているように、誰一人取り残されない社会を作っていくことなのだなと思ったのを覚えています。

発展途上の国は、これからこういう国にしよう、上を目指そうというエネルギーに満ちています。一方で、ある程度発展した国は、上を見るというよりは後ろに取り残されている人がいないかどうか、みんなで一緒に歩んでいけるかどうかを見なければいけないのではないでしょうか。前を見るだけが大切なではなく、時には後ろも振り返って、自分たちよりも遅れている人がいれば、なぜ遅れているのか、その人たちのために何ができるのか、一緒に何をすればよいのかを考える必要があります。

こうしたことを考えられたのも、船内で他の国の青年たちが自分たちの国とどのように関わっているのかを見ることができたからです。朝から晩までずっと一緒に過ごしていたからこそ気づいた点だと思うのです。

今でも私の心の中に残っているのは、この船の事業に参加して、海外の青年と共に暮らし、意見交換などを通して、普段はあまり考えもしないこと、つまり、自分って何？とか、日本という国は海外からどのように見られているのだろうかといった点を深く考えさせられたことです。

### どのような社会貢献活動を行っておられますか。

社会貢献活動だとは思っていません。ただ、自分がやりたいことをやってきただけです。公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパンの理事長を6年間務めていますが、ボランティアです。プランは開発途上国の子どもが学校に行けるように支援したり、井戸を掘るためのお金を集めたりといった活動をしています。どこかの国の女の子が学校に行けるようにな

って、社会で自立して生活できるようになったら、すばらしいことですよね。最近では、インドのスラムでも PC を貸し出して、メールの送受信や、文章作成能力向上といった職業訓練を行っています。私は、募金をしてくださる方々と、お金を必要としている途上国とを結ぶ橋渡し役をしたいと思っています。そのようにして、一人一人が自分の能力を発揮できる社会になることを願っています。

#### **池上清子氏プロフィール**

国連難民高等弁務官事務所、国連本部、国連人口基金を経て、現在、長崎大学大学院教授（熱帯医学・グローバルヘルス研究科）。また、市民社会との関連では、（公財）ジョイセフ、国際家族計画連盟ロンドン本部、（公財）プランインターナショナルジャパン（理事長）でもキャリアを積んだ。一貫して、開発途上国の女性の健康推進、自立支援に携わる。